

京街道

京街道は京都へ向かう道の総称で、大坂へは大坂街道、丹波・丹後・但馬へは山陰街道・宮津街道と呼ばれた。

大坂京街道は、大坂と京伏見に壮大な城を築いた豊臣秀吉により文禄3年(1594)から慶長元年(1596)にかけて、淀川左岸の築堤工事がなされ、堤防道(文禄堤)として誕生、大坂と伏見の最短路となった。

江戸幕府は大坂を直轄地とし、京街道を参勤交代の公道としたが、大名などが朝廷と接触することを避けるため、京山科手前の大津宿から追分廻りで伏見宿・淀宿・枚方宿・守口宿の4宿場を東海道に加え五十七次とした。終点を三条大橋から大坂城の北口の京橋(寝

屋川にかかる小橋が京都に通じる橋の意)としたが、その後幕府は天下の台所として経済的地位の高まった大坂を重視し、終点を高麗橋に変更した。

明治政府は道路行政として、高麗橋(現大阪市中央区)に元標(道路起点)を建て、京橋・片町・野田橋・今市・守口・佐太・磯島・渚・三栗・上嶋・樟葉と大阪府下の長さを29キロメートルと定め、京都府八幡市橋本へ入る道路とした。

その後、桂川左岸の鳥羽街道経路を大阪街道とし、京都大阪間の旧国道1号となる(現在はほとんどが府道)。伏見経路は、現在京阪電車本線が走っている。



写真■大正末期頃の京街道
今市交差点付近から京都方面を見る。
写真左側に淀川が流れている。



写真■現在の京街道(今市交差点付近から京都方面を見る)
左横の大正末期頃の写真とほぼ同位置

コラム 京街道の思い出

この写真は、私がまだ小さい頃、小学校もまだの頃の風景で、京街道の上に立って京の方を見ているところです。手前のうどん屋は私の祖父がやっていました。

朝早く上の方から荷車を牛や馬にひかせて大阪の方へ行くのです。お米の俵や野菜などを沢山積んでかたまて行くのですが、丁度うどん屋が一服するのにいいところだったので、沢山止まって休憩していました。

中程に見える屋根は私どもの家でした。そばに大きな榎の木がよく見えています。幕末の頃はこの京街道を沢山の人々が急いで通ったりしていたと言っていました。【大正9年生】

碑や道標

京街道の面影を残す景観は失われつつあるが、今市で国道と分岐し細い道に入る手前に京街道の説明碑あり、現在でもその存在を伝えている。



写真■京街道には碑や道標が整備されている

■江戸時代の京街道は二間ほどの幅しかありませんでした。京都から大坂への下りは三十石船を使うのが一般的であったため、人の流れは大坂から京都への上りがほとんどでした。

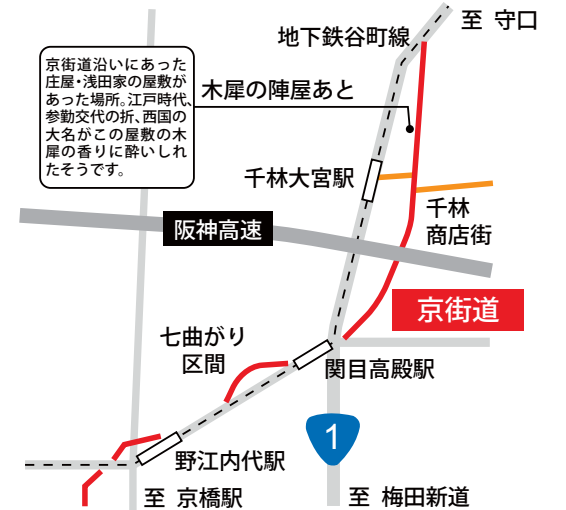
■集落内の京街道には石油ランプが設置され、夕方になると、交代でホヤの掃除と石油の補充をしてまわっていました。

■国道1号は昭和8年(1933)に開通、開通時からアスファルト舗装で、幅が十三間もあったため、十三間道路と呼んでいました。それに対して、京街道の方を旧国道と呼ぶようになりました。当時はまだ国道2号で、昭和27年(1952)の新道路法に基づく路線指定により、国道1号に変更されました。

■街道の名前は、向かう方向の地名で呼ばれていました。同じ街道でも大坂から京都へ向かう場合は京街道、京都から大坂へ向かう場合は大坂街道と2つの名前がありました。



図■京街道概要図
広域図(左)と七曲がり付近の図(下)



京街道七曲がり

大坂城が完成し、豊臣秀吉が文禄3年(1594)伏見城築城の際、大坂城下町整備に大坂城から桃山城、伏見城を結ぶ街道を整備。同時に淀川左岸の枚方から長柄付近まで連続堤防を築いた。

起点は大坂城の京橋口。京橋口より北へ直線に内代の水神社から高殿4丁目南側を通り、蛇行し曲がりくねった道になり、高殿7丁目へ。この付近の道を「七曲がり」と言う。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利した家康が、幕藩体制を維持するため、東海道を整備した(品川宿から大津宿の53次)。元和元年(1615)西国大名の参勤交代路の目的で京街道が追加され(55キロメートル)、起点が大坂の高麗橋となった。



写真■街道を示す道標(上)と七曲がり(下)